

興福寺 国宝館

年中無休

9時～17時(入館は16時45分まで)

※都合により展示替えを行うことがあります。



興福寺は、藤原氏の氏寺として和銅3年(710)の平城遷都とともに建立。五重塔、三重塔、東金堂、南円堂、北円堂などの建造物、阿修羅像や銅造仏頭、無著・世親菩薩像など数多くの国宝・重要文化財が現在に伝わる。また、《天平の文化空間の再構成》を合言葉に、境内の史跡整備事業を展開しており、享保2年(1717)の焼失以降、再建がかなわなかった中金堂が、2018年に落慶。



五重塔

中金堂※

三重塔



南円堂

東金堂

北円堂

法相宗大本山 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48

Tel (0742) 22-7755 <http://www.kohfukuji.com>

※ VR作品「よみがえる興福寺中金堂」 総監修：法相宗大本山興福寺
監修：金子啓明 鈴木嘉吉 製作・著作：朝日新聞社・凸版印刷株式会社

Head Temple of the Hossō School KOHFKUJI

National Treasure Hall

奈良 興福寺 国宝館



興福寺国宝館

興福寺は、和銅3年(710)に飛鳥から現地に移築造営されて以来、焼失と再建を繰り返しながら1300年もの歴史を刻んでいます。現在は、享保2年(1717)の大火で焼失した中金堂の再建事業を進めています。

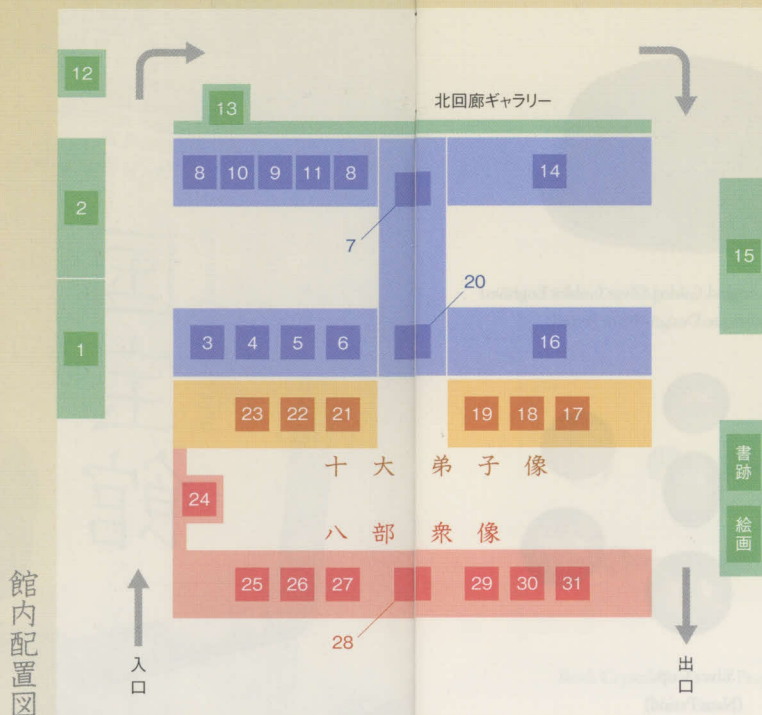
昭和34年に開館された国宝館は、平成22年にリニューアルされ、国宝45点・重要文化財19点を公開しています。天平彫刻の傑作である阿修羅像をはじめとする八部衆や十大弟子像、また躍動感あふれる鎌倉彫刻などが今日に伝えられ、多くの来館者を魅了しつづけています。これらの名宝の仏教文化の真善美に静かに心をお寄せ下さい。

注意事項

- 文化財の写真撮影、スケッチならびに万年筆、サインペン等の使用はお断りします。
- 文化財には手を触れない下さい。
- 混雑時には入館規制がございます。
- 館内では係員の指示に従って下さい。
- 各一回限りの拝観となります。再入場はできません。
- 文化財保護のため、大雨・台風などの場合は閉館することがあります。

興福寺国宝館は、食堂（僧侶が食事をする建物）
 が建てられていた場所に、昭和34年鉄筋コンクリー
 ト造りの文化財保存収蔵庫として開館した。
 奈良時代創建の食堂・細殿の外観をイメージして
 建てられ、地下には旧食堂の奈良時代以降の遺

構が保存されている。館内には旧食堂本尊の千手
 観音菩薩像(国宝)を中心に、興福寺の歴史を伝え
 る仏像、典籍、古文書、絵画、工芸、考古遺物、歴
 史資料を収蔵・展示し、仏教への関心と文化財へ
 の理解を深めていただくことを目的としている。



興福寺国宝館

THE KOHFUKUJI
 NATIONAL TREASURE HALL



大人
 ADULT

2019.06.12

一般現 0700

興福寺国宝館は、食堂（^{じきどう}僧侶が食事をする建物）が建てられていた場所に、昭和34年鉄筋コンクリート造りの文化財保存収蔵庫として開館した。
奈良時代創建の食堂・細殿の外観をイメージして建てられ、地下には旧食堂の奈良時代以降の遺

構が保存されている。館内には旧食堂本尊の千手観音菩薩像(国宝)を中心に、興福寺の歴史を伝える仏像、典籍、古文書、絵画、工芸、考古遺物、歴史資料を収蔵・展示し、仏教への関心と文化財への理解を深めていただくことを目的としている。

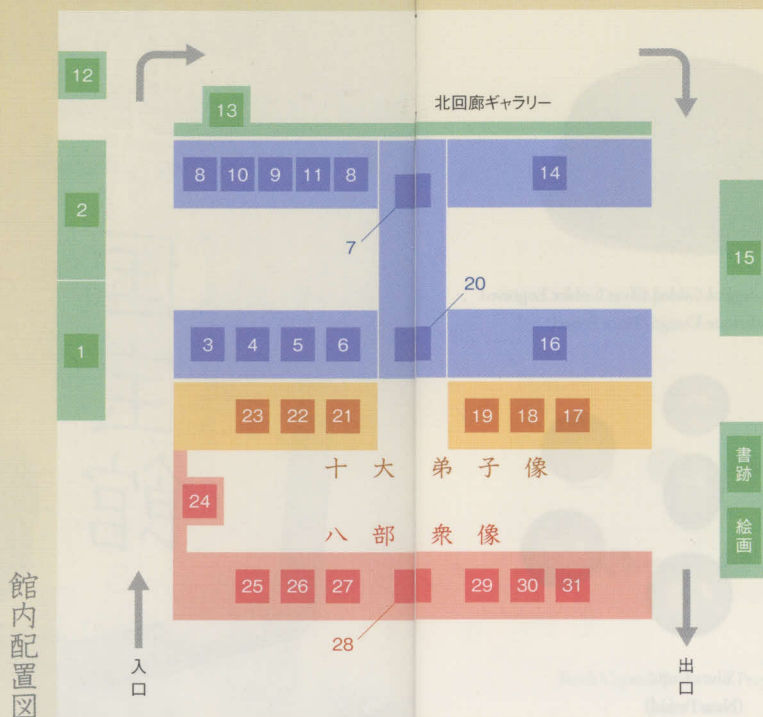


PHOTO : 飛鳥園、金井杜道

国宝
中金堂
鎮壇具

- 銀製鍍金唐草文脚杯
1口 径9.1cm
- 銀製鍍金唐花文鏡
2口 径9.9cm 高3.2cm
- 銀鏡
7口 径9.3cm 高3.2cm
- 水晶念珠玉
5箇 水晶玉6箇

奈良時代



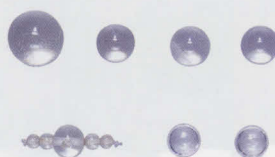
Fragment of a Three-legged Gilded Silver Goblet Engraved with an Arabesque Design (Nara Period)



Gilded Silver Cup Engraved with an Arabesque Design (Nara Period)



Silver Cups (Nara Period)



Rock Crystal Beads and Prayer Beads (Nara Period)

中金堂創建時の多彩で豪華な埋納品

1

和銅3年(710)に平城京遷都と時を同じくして、興福寺は平城京左京三条七坊に創建された。まず建てられたのは中金堂で、地の神に土地を借りることを報告し、許しを得る地鎮儀礼が行われ、須弥壇下に金・銀・真珠・水晶・琥珀・瑪瑙・瑠璃などの七宝類、水晶・琥珀・瑪瑙などの念珠玉類、金銅・銀製などの容器類、水晶・琥珀製六角柱・円柱などの装身具類、銀製唐草文透金具などの装

飾具類、和同開珎・開元通宝の錢貨類、金銅・銀製の刀類、銅製鏡など35種類2,000点近くの宝物が鎮められた。

明治7年(1874)出土品は東京国立博物館に、明治17年(1884)出土品は興福寺に所蔵される。種類と量の多さ、唐からの舶載品を含む豪華さなどから、ともに国宝に指定される。未指定だが平成13年(2001)出土品は興福寺に所蔵される。

国宝

木造

金剛力士立像

定慶作 桧材 寄木造 彩色 玉眼

像高 阿形 154.0cm

吽形 153.7cm

12〜13世紀・鎌倉時代

吽形

Kongō Rikishi Mouth Closed
(Kamakura Period)



阿形

Kongō Rikishi Mouth Open
(Kamakura Period)

仁王像表現の頂点

金剛力士は口を開いた阿形と閉じた吽形を一組とし通常は仁王門などに安置されるが、奈良時代には堂内の須弥壇上におかれる場合が少なくなかった。この一組は治承4年(1180)の西金堂の焼失後、奈良時代草創期の復興像として須弥壇上に安置されていた。写実性、激しい動き、力強さが顕著で、強い風が意識され、筋肉が隆起し、血管が浮き上がるなど、迫真的な鎌倉彫刻の真髄をみることができる。その姿は後世の金剛力士像の規範ともなった。

重要文化財

木造

弥勒菩薩半跏像

像高 57.0cm 13世紀・鎌倉時代

厨子 重要文化財 木造 全高 165.8cm

14世紀・鎌倉・南北朝時代



Enshrined Image of Miroku Bosatsu
(Kamakura Period)

大乗院持仏堂の本尊

木造であるが宝冠・胸飾・環珞の金具は銅製鍍金で精緻に作られ、衣にも縹緗や截金による多種の文様が見られ、像内にも金箔が押されている。鎌倉時代前期の作例で天蓋からは飛天六体を吊っている。厨子は弥勒像より少し後の作。扉には弥勒から伝えられた法相の教えを受け継ぐ無著・世親・玄奘・慈恩大師基らの祖師を系統的に描いており、これに維摩居士と文殊菩薩・四天王・不動明王・弥勒の化身とされる大輪明王が加わっている。

国宝

木造

千手観音
菩薩立像

像高520.5cm
13世紀・鎌倉時代



Thousand-armed Kannon (Kamakura Period)

じきどう
旧食堂の本尊

治承4年(1180)の兵火により焼失した食堂はその
後再建され、この鎌倉時代の食堂は長く残ってい
たが、廃仏毀釈の嵐の中で明治7年(1874)に壊さ
れた。しかし幸いにも本尊は被害を逃れ、一時中金
堂や南円堂に安置された後、食堂跡に昭和34年
に建てられた国宝館へ移安。像の内部には多数の
納入品があり、多くの結縁者による勧進事業であっ
たことがわかる。

国宝

木造

天燈鬼立像
龍燈鬼立像

康弁作 桧材 寄木造 彩色 玉眼
像高天燈鬼78.2cm
龍燈鬼77.8cm

建保3年(1215)・鎌倉時代



Ryūtōki
(Kamakura Period)

Tentōki
(Kamakura Period)

鬼彫刻の傑作

四天王などに踏まれている邪鬼^{じゃき}が立ち上がり、守
護神となったようなユーモラスな珍しい作例。灯明
で仏前を照らす役割をもつ。龍燈鬼は運慶の子康
弁が制作したことが像内納入の文書からわかる。
一組の天燈鬼も同時期の作。龍燈鬼のぎざぎざの
眉は銅板製で、体に巻きつく龍の背びれには動物
の皮を用いるなど、木以外の素材を併用するのも
この像の特色である。ともに水晶板をはめた玉眼^{ぎよくがん}
がいきいきとした効果を發揮している。

重要文化財

木造

釈迦如来像頭部
(木造仏頭)

運慶作 像高98.0cm
文治2年(1186)・鎌倉時代



Head of Shaka Nyorai Image
(Kamakura Period)

運慶作とされる西金堂の本尊

享保2年(1717)の西金堂の火災時に頭部のみが救われ、銘文からその本尊釈迦如来像の頭部であることが判明した。西金堂本尊に関する文治2年(1186)の記録から大仏師運慶の作と考えられる。焼失した天平草創期の乾漆像の復興がめざされ、表現には天平風が意識されている。

重要文化財

木造

化仏・飛天

像高30.8~62.0cm
12~13世紀・鎌倉時代



Keshutsu (Transformation Buddha)
(Kamakura Period)



Hiten (Flying Celestial Beings)
(Kamakura Period)

木造仏頭と一具の作

運慶が文治2年(1186)に制作した西金堂本尊釈迦如来像の光背に付属していた化仏3体と飛天8体のうちの4体である。それぞれ作風が異なり、同じ時期に作られたものかどうかは明らかでない。享保2年(1717)の西金堂の火災時に救出された。

重要文化財

木造
梵天立像
帝釈天立像

像高 梵天 171.5cm
帝釈天 166.0cm
12〜13世紀・鎌倉時代



Taishakuten
(Kamakura Period)



Bonten
(Kamakura Period)

西金堂釈迦集会群像の一部

鎌倉時代初期の貴重な梵天・帝釈天像であるが、もと西金堂に安置されていたと考えられる。衣文の影りは浅く全体的に穏やかな作風であるが、細部の衣裳には中国風の新形式が見られ、帝釈天像の形式は三十三間堂の像などに影響を与えている。

国宝
銅造
燈籠

総高 200.0cm
弘仁7年(816)・平安時代



Lantern
(Heian Period)

南円堂創建当初の伝来品

興福寺南円堂の前にあった燈籠で、藤原真夏が
発願し、弘仁7年(816)に制作された。火袋(別置)
の扉の文章は弘法大師、書は橘逸勢と伝えられ
る。東大寺大仏殿前の燈籠に次いで古く、形が美
しいことから「南円堂形」と呼ばれる。

重要文化財

木造

釈迦如来坐像

像高227.0cm
11～12世紀・平安時代



Shaka Nyorai
(Heian Period)

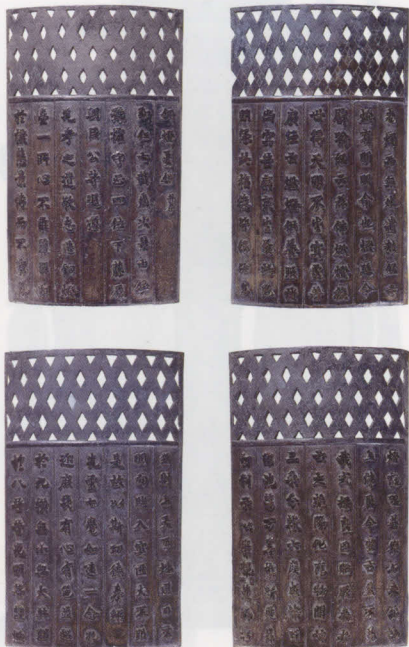
14

国宝

銅造

燈籠火袋羽目

縦43.8cm
横28.2cm
弘仁7年(816)・平安時代



Lantern Chimney Panels
(Heian Period)

13

空海の撰による銘文

南円堂の前にあった燈籠の火袋(火を灯す所)の羽目板は四面現存しており、それぞれに七行九字詰の銘文が鑄出されている。文は弘法大師空海が構想し、書は三筆の一人である橘逸勢^{たちばなのはやなり}の筆と伝えられる。楷書に行書を交えた風格のある書体は見事である。

定朝様の優品

丸く穏やかな顔つきや浅く整えられた衣文表現など11世紀半ばに確立された大仏師定朝^{じょうちょう}の様式を踏襲する優品。ヒノキの寄木造で頭と体の中心は縦の四材で、両足は横の一材で構成されている。もと東金堂にあったがそれ以前の伝来は明らかでない。

国宝

木造

板彫十二神将像
いたばりじゅうにしんしょう

縦 88.9~100.3cm

横 33.6~42.7cm

厚 22~33cm

11世紀・平安時代



Relief Carvings of the Twelve Heavenly Generals (Heian Period)

ユーモラスな浮彫の傑作

15

薬師如来の守護神として、その台材の腰にはめられていたと推定される。日本の浮彫の傑作として著名な作品で11世紀の作。十二神将の12面すべてが残り、ヒノキの一枚板(1軀は2材)から彫り出している。いずれもユーモラスで親しみやすい姿を示すが、浮彫とは思えないほど表現には立体感がある。なかには歌舞伎役者のように激しい動きを止

めて誇張する像、顔と体を正面向きに表現する像などもあり、バラエティーに富んでいる。

尊名は次の通り。

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| 1 毘羯羅大将
びから | 2 招杜羅大将
しょうとら | 3 真達羅大将
しんだら |
| 4 摩虎羅大将
まこら | 5 波夷羅大将
はいら | 6 因達羅大将
いんだら |
| 7 珊底羅大将
さんていら | 8 頽伽羅大将
あにら | 9 安底羅大将
あんていら |
| 10 迷企羅大将
めきら | 11 伐折羅大将
ぼさら | 12 宮毘羅大将
くびら |

国宝
銅造
仏頭

高 90.0cm
天武14年(685)・白鳳時代



Head of Buddha Image
(Hakuhō Period)

白鳳文化期の貴重作

治承4年(1180)の平家の焼き討ちで大部分の堂塔が失われた興福寺の鎌倉復興期に、東金堂の本尊として飛鳥の山田寺から迎えられた如来像の頭部。山田寺は大化改新で活躍した蘇我倉山田石川麻呂が建てた寺で、この像は、彼の冥福を祈り天武14年(685)年に完成された白鳳彫刻の傑作として知られる。応永18年(1411)の火災時に首から下が失われ、その後、昭和12年(1937)の東金堂修理の時に、火災後に制作された現本尊の薬師如来像の台座の中から発見された。

国宝
銅造
華原磬

総高 90.0cm
口径 60.0cm
8世紀・奈良時代



Kagenkei Gong and Stand
(Nara Period)

精緻極まる鑄造技術

天平6年(734)創建の西金堂に、阿修羅像などと共に置かれた儀式用の楽器。『金光明最勝王經』にみえる「金鼓」を造形化したもので、室町時代に「華原磬」と名付けられたとされる。鑄造技術の優秀な作風から奈良時代または中国唐時代の制作とする説がある。当初は遠河(奈良県天川村洞川)産の白石に乗ると記録されるが、いつの時代かに失われた。その後、興福寺で進めている「天平の文化空間の再構成」の一環として、天川村洞川財産区のご好意により、洞川産の大理石で復元した。

国宝
だつ かつ かん しつ づくり
脱活乾漆造

じゅうだい で し
十大弟子立像

像高 144.3〜152.7cm
天平6年(734)・奈良時代



The Ten Great Disciples (Nara Period)

釈迦に随侍した10人の高弟

一般にはかしょうあなん あなりつしやり はつめくけんれん すぼだい迦葉・阿難・阿那律・舍利弗・目犍連・須菩提・
かせんわん ふるなう ぼりらごら迦旃延・富楼那・優婆離・羅睺羅をさすが、西金堂
の場合は釈迦の子供の羅睺羅を十大弟子とは別に
造っている。享保2年(1717)の火災では10体すべて
が救出されたが、寺に現存するのは6体のみである。
他に東京藝術大学に表面が失われ内部の心木の
木組を留める像が1体あり、大正12年の関東大震災

で失われた旧大倉集古館の優婆離像などが知られ
ている。現存する6体は舍利弗・目犍連・須菩提・富楼
那・迦旃延・羅睺羅と呼ばれているが、制作当初の名
称はよくわからない。このうち羅睺羅は目を閉じてい
ることから、盲目の僧・阿那律、須菩提は若くて美男の
阿難であつたらう。他は不明である。年齢や性格の
違いを表情や衣文線などの表現に反映させている。

17 舍利弗 しゃりほつ 像高152.7cm

舍利弗は舍利子とも記され、智慧第一とたたえられる。舍利弗と目犍連を特に二大弟子と呼ぶことがある。この像が舍利弗として造られたかは明らかでないが、腰高で瘦身の厳肅な風貌の青年で、それに呼応して衣文も縦長にあらわされている。

18 目犍連 もくけんれん 像高148.7cm

目犍連は目連ともいわれ、十大弟子のうちで神通第一とたたえられる。幼なじみの舍利弗とともに釈迦の門にいち早く参加した。神通力で餓鬼道の母を救出したことが今日のお盆の起源となったが、この像が目犍連であったかは明らかでない。

19 迦旃延 かせんねん 像高144.3cm

迦旃延は釈迦の十大弟子の中で論義第一とされているが、この像が迦旃延として造られたかは明らかでない。しかし、痩せた老相で、眉をひそめ、上歯が少し欠ける口を開いて何かを説く様子は、論義第一にふさわしい。

21 羅睺羅 らごら 像高149.4cm

羅睺羅は釈迦の実子であり弟子の一人ともされるが、興福寺西金堂には十大弟子とは別に羅睺羅が安置されていたことが記録からわかる。この像は目を閉じることから盲目の僧阿那律であった可能性が高い。

22 富楼那 ふるな 像高148.7cm

富楼那は弁舌にすぐれ、十大弟子のうちで説法第一とされる。この像が富楼那として造られたかは明らかでないが、老相で額に皺をよせる姿には、優しい慈悲深さがよく表現されており、衣の皺も若い須菩提などより多く表している。

23 須菩提 すぼだい 像高147.5cm

現存する興福寺十大弟子像の中ではもっとも若く、明るく微笑する少年の僧侶像である。いま須菩提と呼ばれるが、当初は美男の仏弟子としてよく知られる阿難として造られた可能性が高い。阿難は最後まで釈迦のもとで仕えた。

脱活乾漆造の技法

脱活乾漆造の技法は、奈良時代に盛んに用いられ、大量の像がつくられた。7世紀後半から8世紀はじめの飛鳥時代(白鳳文化期)には、若干の例があるのみで、平安時代に入るとすっかり衰え、それ以後盛んになることはなかった。奈良時代独特の仏像制作技法といってよい。

【制作順序】①粘土で形をつくり、その上に麻布を着せ、漆で固めて外形をつくる。②ある程度出来上がったところで、背中などの一部を削り抜き、中の土を外に出し、内部補強のために木組みを入れ、開いた穴を布でふさぐ。③木屑を漆で混ぜて練り合わせた木屎漆で表面を調整して、彩色や箔を施して仕上げる、という技法である。

興福寺の八部衆や十大弟子は、はじめから心木を立て、横木を合わせて木組みをつくり、その上に粘土を盛り上げたものと考えられる。

脱活乾漆造の構造



左は東京藝術大学蔵の十大弟子像。沓(くつ)まで通る2本の心木と、それに挟まる頭部の心木および横板が4か所にみえる。右は東大寺法華堂多聞天の心木と構造。



拝観券

大人
ADULT

2019. 06. 12

一般現 0700

国宝

脱活乾漆造

八部衆立像

像高1480~1554cm
天平6年(734)・奈良時代



27



26



25



24

The Eight
Mythological Beings
(Nara Period)



31



30



29



28

西金堂安置の異形の守護神

八部衆はインド神話に登場する神々で、仏教に帰依してその守護神になった。西金堂の像はいま五部浄・沙羯羅・鳩槃荼・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・畢婆迦羅とされるが、經典では、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽を当てており、草創期にはこの名前が付けられていたものと考えられる。西金堂の八部衆像のうち、阿修羅・五部浄・沙羯羅・乾

闥婆の4体が少年像であることが注目され、そこには発願者の光明皇后の考えが反映した可能性がある。再三の火災にもかかわらず8体すべてが奇跡的に現存する。いずれも15キログラム前後という軽さが幸いしたのであろう。ただ五部浄像だけは上半身のみが残り、以下が失われている。なお、この像の右肘から先が明治時代に東京国立博物館に収蔵されている。

24 ^{ごぶじょう} 五部浄 現状総高50.0cm

象の頭をかたどった冠をかぶり、少し上を見つめる敬虔な少年像。上半身のみが残るが右手の肘から先が東京国立博物館にある。『金光明最勝王経』などにみえる「天」に相当する神で、仏教の世界観にある五部浄居天を司る。



25 ^{ひばから} 畢婆迦羅 像高155.4cm

豊かな顎ひげをたくわえた壮年の像で、威厳と風格がある。いま畢婆迦羅とされるが、当初は『金光明最勝王経』などに説かれる「龍」として造られたと考えられる。なお、蛇神「摩睺羅伽」とする説もあるが、蛇はどこにも表されていない。



26 ^{くはんだ} 鳩槃荼 像高150.5cm

いま鳩槃荼と呼ばれるが、当初は『金光明最勝王経』などに説かれる「夜叉」として造られたと考えられ、獣にも近い表情を示す。目頭を立てて怒り、口を大きく開け、頭髪は逆立ち、眼部には黒い石（あるいは練り物）をはめている。



27 ^{けんだつば} 乾闥婆 像高148.0cm

両目を閉じて瞑想する厳粛な少年像で、獅子冠をかぶり直立する。乾闥婆は楽器を奏でる楽神。この像の頬がふつくと張り、面の取り方が少し角張るところは、阿修羅・五部浄、沙羯羅など他の八部衆の少年像とも共通する。



28 ^{あしゅら} 阿修羅 像高153.4cm

阿修羅はインド神話に登場する戦闘の神で、仏教に帰依してその守護神になった。一般的には激しい怒り顔で3つの顔と6本の腕をもつ姿に表されるが、興福寺の像には怒りや激しさが見えず、表情は繊細で内面的であり、腕と体が細い少年の姿で表される。その表情には懺悔という仏教で重要な宗教行為が反映されているとも推定される。



29 ^{さから} 沙羯羅 像高154.5cm

無垢な表情のあどけない少年像で、頭部から左胸にかけて蛇が巻きつくことから、造立当初は蛇神の「摩睺羅伽」として造られたのであろう。なお、二十八部衆中の沙羯羅龍王を重視し、竜に当てる説もある。



30 ^{きんなら} 緊那羅 像高152.4cm

頭上に一角があり、額の中央に縦長の眼を表す異形の像。敬虔な表情であるが目頭を立てて少し怒るなど厳しさを増している。緊那羅は歌舞を司る神であるとされるが、右肘から先が失われているため持ち物は不明である。



31 ^{かるら} 迦楼羅 像高149.0cm

迦楼羅はインド神話にみる蛇を喰う鳥で、伎楽などにも登場する。鶏頭をもつ半獣半人像で、嘴を強く尖らせている。瞳に黒い石（あるいはガラス）をはめ、緊張した面持ちである。いま頭頂部が破損して内部の心木が見える。

